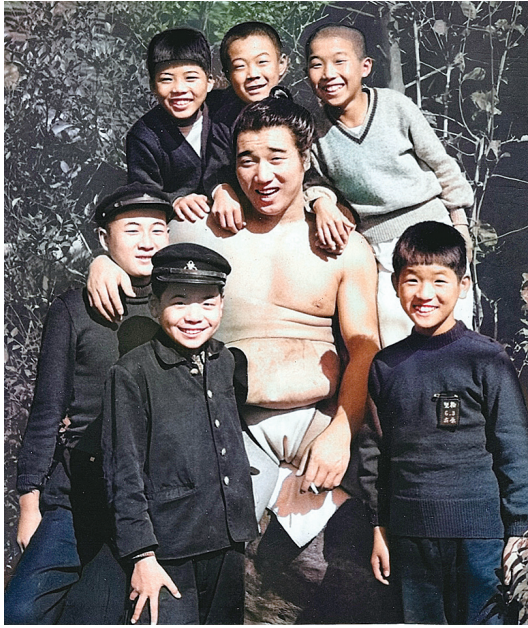




方言とお国なまり (上)

あぐどが先に出た

庄内交通のベテラン観光バスガイド嬢は懐かしく思ひ出す。地元庄内弁を内外の観光客に伝えた時の柏戸に關してのエピソードだ。引退し鏡山親方となった後、審判部に所属し、土俵のお目付け、審判長として長年協会業務をこなしてきた。物言いがついた時、場内説明が仕事の一つ。そしてある時、マイクを持った。「ただいまの協議についてご説明します。行司軍配は〇〇が有利と見て、挙げましたが、団体ではないかと物言いがつき、協議した結果、東力士の「あぐど」が先に出ており、西力士の勝ちといたします」とアナウンスしたのだ。館内の



門したが、お国言葉は身に染みついていたので。

バスガイド嬢の困惑

バスガイド嬢に戻ると、このエピソードを庄内の名所回りの合間に披露し、好評を得ていたという。しかし、ある日、柏戸と全く同郷の櫛引地域の客が車内において「故郷の英雄を笑いものにするのはやめてほしい」とクレームをつけてきた。

観客からは「?」「?」を伴うざわめきが広がった。庄内人の多くは分かる。「あぐど」とは「かかと」のことだ。仕事を終え、審判部室に戻った後、周囲から指摘され「ワシがそんなふうになつたのか?」と自分自身が驚いたほど。16歳で上京、伊勢ノ海部屋に入

少年ファンに囲まれながら指にたばこを挿んだ。当時は20歳になつたらできる「大人のたしなみ」という位置づけだったようだ

男性客だったらしいが、ガイド嬢たちの間で困惑する雰囲気になってしまい、このエピソード披露は自粛、以後取りやめになったという。

もったいない話ではある。披露の仕方にも問題があったように思えない。県外に出て著名になつた庄内人が「いつまでも地元の人を忘れない故郷思いの持ち主でした」というオチをなぜ理解しようとしなかつたのか? その櫛引の人は東北弁で後に引きずるような嫌な体験があつたのだろうか? など思ひは巡つてしまふ。

方言語彙減つていく

それにもまして地方文化の一つであるのに方言は危機に瀕している。この逸話をきっかけに庄内在住の高校生たちに「あぐど」を尋ねたが意味が分かる人はごく少数だった。単語自体は昔から青森から福島まで東北地方全体で流通してきたものだった。また体の一部と言えば「眉毛」を指す「こ

のげ」の意味も分からない生徒が大多数だった。こちらも古語にゆかりがある。ガイド嬢たちは庄内弁の説明に關しては今も変わらず熱心で「ご飯を食べる。食べなさい。食べよう。をわすか1音ずつで庄内弁は表現できます」と語り掛け「それは『く』『げ』『こ』です」と明かすと大ウケになるそう。一方でガイド嬢たちにしても、子ども時代からテレビがすぐそばにあり、日頃から標準語に慣れ、大人になつて、わざわざ自分の子供たちに方言を伝えていくわけでもない。なので、語彙は消えていく。

食べ物ならば餅

昭和13(1938)年生



大蛇石(左)とともに出世披露を受けた富樫

心強かつた同期生

○:昭和29年秋場所の同期生とは終生友達だった。秋田県横手市出身の土田房

まれの柏戸にとつて、小さい頃に身につけた言葉・文化は、それこそ「三つ子の魂」ではないが、大人になつても消えることはなかつた。例えば食べ物に關しては「ぼた餅」が好物だった。酒もいけるクチで、甘党であり辛党の両刀遣い。現役時代は夏巡業の「鶴岡場所」「酒田場所」になると母・かつるがぼた餅を作つては会場まで持つていった。地元名物の笹巻も同様に好きで黄色になるあく巻も、三。同じ13年生まれ(土田は早生まれで1学年上)で、ともに東北出身だったこと互いに心強かつたようだ。長く「大蛇石」のシゴ名で相撲を取り、十両に昇進した。同じ時津風一門・錦島部屋に所属したが、部屋には稽古土俵がなく、同じ環境だった富樫(柏戸)と時津風部屋と一緒に稽古した同士。「イシ」「トガシ」と呼び合い、励まし合つた。

敬称略 富樫 嘉美

毎週火曜日付に掲載